

2019年4月7日（日）

主 題：「私は山に向かって目を上げる」

—天地を造られた主—

テキスト：詩篇121篇1-3節

はじめに

- 今日の礼拝説教は、北浜チャーチ2019年度の「年間聖句」からです。
この聖句は多くの方々に親しまれている、聖句のひとつであります。一緒に、詩篇121篇1～3節をお読みしましょう。
- 121:1 私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。
- 121:2 私の助けは、天地を造られた主から来る。
- 121:3 主はあなたの足をよろけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。
- 詩篇120篇～134篇は「都上りの歌」と言われ、エルサレム神殿に向かう巡礼の歌です。イスラエルの民は、これらの詩篇を歌いながら、旅をしたと言われます。各地に散っているイスラエルの民は、年に3回エルサレムの神殿に集まることが定められていました。申命記
- 16:16 あなたのうちの男子はみな、年に三度、種を入れないパンの祭り、七週の祭り、仮庵の祭りのときに、あなたの神、主の選ぶ場所で、御前に出なければならない。主の前には、何も持たずに出てはならない。
- それはイスラエルの3大祭りである「過越の祭り」、「五旬節」、「仮庵の祭り」の時期です。イスラエルの民は、東西南北からシオンに向かい山々の位置するエルサレムに集まってきました。そこで、神に礼拝を捧げるためでした。したがって「都上りの歌」、「都もうでの詩」、という表題がつけられています。
- 詩篇121篇の作者も、エルサレムの都へ向かう途上、山々を見上げながら自分の人生を想い、人生の守り、安全を願い、本当の助けはどこから来るのだろうかと自問自答し賛美しました。
- ところで、私たちの人生も、天のエルサレムに向かう旅路です。天の都に入れば、神と永遠に過ごす幸いな時が待っています。しかし現在、私たちはその途上にあります。天の都に向かう巡礼者として、どのような歩みをするべきでしょうか。具体的に言えば、2019年度、私たちはどのような姿勢で歩むべきでしょうか。
- 今日、一緒に2019年度の「年間聖句」である詩篇121篇から、私たちの生き方を学びたいと思います。

大切なポイント**1. シオンへの大路を歩む人**

・詩篇 121 篇 1、2 節

121:1 私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。

121:2 私の助けは、天地を造られた主から来る。

1) 都上りの歌

- ・日本語は単数形、複数形がはっきりしない言語です。「私は山に向かって」とありますが、原語では複数形で「山々」となっています。「山々」はパレスチナの地形特徴をよく表しています。私たちは、「山に向かって」と言われますと、アルプスの麓から眺める美しくい壮大な山々を描いてしまいます。
- ・しかし、パレスチナには、日本のアルプスやスイスにあるような美しく、壮大で、感動的な山々はありません。パレスチナの山は、小高い石灰岩の丘のようです。荒々しく、素っ気ない、岩山の連なりです。「山」そのものの標高も、それほど高くはありません。(Photo)
- ・しかし、神への信仰を持つ巡礼者は、その何もない「山々」に神が臨在されることを知っていました。これが、私たちが覚えなければならない、聖書の神です。
- ・次に、作者は「私の助けは、どこから来るのだろうか」(1 節) と歌いました。皆さん。私たちが助けを必要とする時、助け手が傍らにいないことを想像してみてください。家族や友人や、教会の仲間たち、信頼できる人が近くにいてくれるのは、本当にありがたいことです。しかし、時折、そういう助け手が側にいなくなってしまうような、人生の危機に遭遇することがあります。
- ・シオンへ向かう巡礼者の旅路は、荒々しい岩山ばかりで、助け手が現れる所ではありません。そういう状況で、「私の助けは、どこから来るのだろうか」と歌いました。これが、私たちが覚えなければならない聖書の地、イスラエルです。
- ・「私の助けは、天地を造られた主から来る」(2 節)
詩篇 121 篇の作者は、あらかじめ答えを知っていて、自分にこのように問いました。人間的に見て、助け手が現れる山ではない所で、つまり何もない(無)の所に、イスラエルの神はおられるという信頼です。
聖書の信仰者たちは、「助け手がない」と思われた絶望を何度も経験しました。そこで何度も「助け」をいただきました。ですから、作者はその信頼を、歌の冒頭で告白したのでした。
- ・皆さん。信仰者でも苦しむことはあります。信仰の挫折を味わうこともあります。祈れないまま、長い時間を過ぎることもあります。人間的チャンネルで、助け手がない場言もあります。正しく、そのような人生の旅路で思い起こすのが、詩篇 121 篇のみことばです。目を上げて、天地を造られたお方を見上げることです。これが天のエルサレムに向かう「都上りの歌」です。

2) 神殿に向かう聖徒

- ・ここまでで、私たちはエルサレムの神殿に向かう巡礼者の歩みは、どのようなものかが分かりました。人生の旅路は、決してバラ色ではありません。荒涼とした地を歩く時もあります。そして助け手が必要であり、助け手が欲しいと願っても、そこに本当の助け手がないこともあります。そういう時、失望を味わいます。

- ・そのような旅路は現実にあります。しかし、その旅路こそ神にお出会いし、神の助けを経験できる機会でもあります。作者はその時、「私は山に向かって目を上げる。」と歌いました。何もない荒れた山々に目を上げるとは、人間的には助け手が見当たらないことを示します。自然の荘厳さや雄大さを持つ山ではありません。しかし作者は、そのような山々を見て歌いました。

「私の助けは、天地を造られた主から来る」(2節)

- ・皆さん。この1節、2節の中に、神を信頼し歩む人の大切な信仰姿勢を見ることができます。すなわち、何もない(無)山々(所)で、神はご臨在くださることです(有)。そこに無から有を経験できる神がおられます(臨在)。これこそ、イスラエルの神であります。そして、天のエルサレムに向かう私たちの信仰生活で、神の幸いを味わうことができる旅路です。
- ・では、どうして無から有を知ることができるのでしょうか。少し掘り下げてみましょう。

2. イスラエルを守る神

詩篇 121 篇

121:3 「主はあなたの足をよろけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。」

121:4 見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない。

- ・この聖句は、少なくとも2点大切なことを教えてくれます。

1) 神の万全の守護

- ・巡礼者である旅人が、不安に思ったことは3つありました。

① 自然災害、②健康、③不慮の事故

① 自然災害からの守り

イスラエルの三大祭りの時期、とくに五旬節の頃は、昼間は日射病になるほどの強い太陽光線です。ですから昼間の旅を避けて、夜に入っても旅をすることもあったようです。しかし夜になれば、ジャッカルなどの野生動物(猛獣)も出現する危険がありました。つまり、昼も夜も、自然災害から守られると歌いました。それが次の聖句です。

121:6 昼も、日が、あなたを打つことがなく、夜も、月が、あなたを打つことはない。

② 健康の守り

旅は疲れます。長旅となれば、足も痛み疲労してきます。健康面が大きな問題です。しかし、旅人は「主はあなたの足をよろけさせず」(3節)と歌いました。5節では、「主は、あなたを守る方。主は、あなたの右の手をおおう陰」と歌いました。右の手とは利き手のことで、その利き手が使えなくなることがないように「右の手をおおう陰」となってください。つまり、健康面で、主である神がお支えくださり、守りがあると歌いました。

③ 不慮の事故からの守り

- ・新約聖書に、良きサマリヤ人の話しがあるように、パレスチナの地では巡礼者の旅はい

つ強盗に襲われるか知れません。そのような不慮の事故からも守られる、と歌いました。

- 121:7 主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。

詩篇121篇はわずか8節の短い讚美ですが、「あなたを守る」という言葉が6度（3、4、5、7、8節）登場しています。つまり、神そのものがお守りくださると歌いました。

- 旅人は、「天地を造られた主」（2節）、すなわち「イスラエルを守る方」（4節）は、守り抜いてくださる神と確信しています。そして、次のように賛美しました。

2) 永遠に守られる神

121:8 主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。

- 巡礼者は、エルサレムへの途上でしたが、「行くにも帰るにも」と歌いました。往路だけでなく、復路も、そしてとこしえまでも守られると確信しました。これは私たちの旅路も、罪と死とのさばきから助けてくださった主が、天のエルサレムに凱旋するまで、守り抜いてくださるということです。このように、作者は神に対して絶対的信頼を持っていました。信仰とは、本来こうあるべきです。

3) 適用

- それでは、私たちは詩篇121篇から何を学ぶことができるでしょうか
信仰生活の旅には、不安があります。当時、巡礼者に3つの不安（健康、自然災害、不慮の事故）がありましたが、神の絶対的守りはあります。絶望の中にも「主の助け」があります。

① 神の愛

- それでは、なぜ、神はお守りくださるのでしょうか。

⇒神はご自身の民を愛しておられるからです。

イスラエルの神、私たちが信頼する神は、愛の神です。人間が手によって作り出した神ではありません。人間を造られた神です。神はイスラエルを「私の愛する民」と呼ばれました。私たちは愛されています。

- 神は愛であるお方です。私たちの信仰の旅路は、その神に信頼（信仰）を持って歩むべきです。しかし、そこで問題となるのが神への不信です。

巡礼の旅は荒々しい地を通ります。そこで、3つの災いに会うこともあま

す。神が見えなくなります。いいえ、神は目に見えるお方ではありません。神への信頼が失われてしまうのです。

- そのような弱い巡礼者に、神は常に変わらず、愛を注いでくださいます。

神はこのようなお方です。

121:4 見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない。

121:5 主は、あなたを守る方。主は、あなたの右の手をおおう陰。

121:6 昼も、日が、あなたを打つことがなく、夜も、月が、あなたを打つことはない。

121:7 主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。

121:8 主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。

- イエス・キリストも言われました。ヨハネ福音書

14:18 わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。

神は私たちを愛し、守り、荒野の中でも導いてくださるお方です。私たちはこのようなすばらしい主である神と、人生の旅路を歩める幸いに感謝しようではありませんか。

② 神への信頼

神への信頼が、巡礼の旅を続ける唯一の杖です。

- ・ 2019年度、私たちの前にはどんなことがあるか分かりません。しかし、昼も夜もお守りくださる神が、いつもいてくださいます。天のエルサレムに向かう巡礼の旅路で、遭遇するかも知れない不安からお守りくださる神がおられます。

『例 話』

- ・ 私はこのような話を聞いたことがあります。それはサーカスの空中ブランコをするプレイヤーです。地上から高い所で、空中ブランコ・プレイヤーは、右から左へ、そして左から右へ飛び交います。彼らの命は上か吊るされたロープに命がかかっています。
- ・ もしタイミング外して、ロープをしっかりと掴まないならば、地上に落下します。反対側から来るロープを、大丈夫と信頼し、しっかりと掴むならば、向こう側へ渡ることができます。
- ・ 大切なことは、命を託するロープを信頼することです。と空中ブランコ・プレイヤーは言いました。
- ・ 皆さん！ 神を信頼するとは、そのようなことです。ロープをしっかりと握ること、それは信頼です。神のみことばを、しっかりと握ることです。聖書の神は天地を造られたお方、そして愛の神です。失敗することができない完全な神です。そのお方への信頼は、巡礼の旅を続ける上で大切な杖のようです。

ま と め

主 題：「私は山に向かって目を上げる」

—天地を造られた主—

- ・ 今日、今年度の年間聖句である詩篇121篇から、神のお心を学びました。私たちは新年度も神を見上げ、神にある幸いを経験する日々を過ごしたいと願います。
- ・ イスラエルの神は、私たちの神でもあります。詩篇121篇作者は、神はエルサレムの神殿に向かう旅を守ってくださると歌いました。私たちにとって、何が大切でしょうか。
 1. 神への信頼（信仰）
神への信頼は、巡礼者が旅を続ける唯一の杖です。
 2. 神の愛に応答
神の本性は愛です。私たちは、このような神にどのように応答する者でしょうか。つぶやきや不信ではありません。
⇒ 神が愛してくださったように、私たちも神を愛することです。

- ・最後に詩篇 121 篇 1、2 節を、もう一度お読みしましょう。
121:1 私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。
121:2 私の助けは、天地を造られた主から来る。

* God bless you!